

ジャック・ロンドン作「最強の謎解きマスター」

大矢 健訳

村には不満が渦巻いていた。女たちはかん高く張りつめた声でおしゃべりをし、男たちはだんまりを決め込んで、疑いの表情を浮かべていた。犬たちでさえ疑い深くなって辺りをうろついていた。犬たちは村全体に立ちこめる落ち着きのなさに何となく危機感を覚え、問題発生の知らせが届いたら真っ先に森に逃げられるようにと準備していた。あたり全体が、疑心暗鬼の空気に包まれていたのである。誰もが隣人に不安を覚え、皆が隣人に疑念を抱いていることを誰もが意識していた。子どもたちも閉息し深刻な表情だ。これ全部の原因であった幼いディーヤは、はじめ母であるフーニアに、次に父であるバウンに、お尻をしこたまペンペンされていた。そして、今、泣きべそをかきかき、浜にひっくり返されていた大きなカヌーの下から悲観的に世界を観察しているところだった。

さらに事態を厄介にしたのが、まじない師のスクन्दーである。彼は名誉失墜の憂き目にあっていた。だから、この災いをもたらした犯人を見つけ出すのに、彼の魔術にお出ましを願うというわけにはいかなかったのである。というのも、一月と前のこと、スクन्दーは、気持ちの良い南風が吹くであろうと予言してしまっていたのだ。南風となっていれば、トンキンでのポトラッチに村人たちは向かうことができていたはずなのだ。そこでは、タク・ジムが、二十年に

わたって蓄えていた財産を皆に配ることになっていた。ところがである、ポトラッチの日が来てみると、悲しい北風が吹き、出発した三艘のカヌーのうち一艘は高波に飲み込まれてしまった。二艘も岩に叩き付けられ粉々となった。子どもも一人、溺れて死んだ。勘違いして別の袋からまじないの紐を引いてしまったのだ、単純なミスだったのだ、とスクन्दーは釈明した。けれど、村人たちは聞く耳をもたなかった。肉と魚と毛皮の貢ぎ物が彼の家の戸口に届けられることは、もはやなくなった。それでスクन्दーは家の中に引きこもり、すっかりむくれて後悔のあまり断食している、そう人びとは信じていた。ところが実際には、たっぷり蓄えられた食料庫から彼はたらふく喰って、群衆というのは何と気まぐれなものか、と思いを巡らしたのである。

なんと、フーニアの毛布がなくなってしまうていたので。上質の毛布で、厚さといい暖かさといい、素晴らしい出来のものだった。それがとても安く手に入ったというのも、フーニアの自慢だった。あんなに簡単に毛布を手放すなんて、隣の隣の村のタイクワンは間抜けだね、とフーニアは言った。しかし、彼女は知らなかったのである。その毛布が殺されたイギリス人のものであったということを。そのイギリス人が行方不明となったため、アメリカの警備船がしばらく沿岸を探索し、艦載ボートが秘密の入り江にまで入り込んで、息も絶え絶えうろつき回っていたことを。また、タイクワンが慌ててその毛布を処分したのは、同じ村の者が《政府》に説明したりする必要がないようにと配慮してのことだったことも。それで、彼女の自信は揺るぎないものになっていた。そのうえ女たちがフーニアを羨むものだから、彼女の自慢は際限もなく高まって溢れ出し、村を満たしただけでは足りず、アラスカ海岸をつたってダッチハーバー(ダッチ)からセントメアリーズ(メアリス)まで流れ出していった。フーニアのトートテムは正しく言祝がれることとなり、彼女の名も、魚が採られ宴が催されるところならどこでも、男たちの口にのぼるものとなった。フーニアの毛布、そしてその驚嘆すべき厚みと暖かさ、と。このような事の成り行きは、まことに不可思議な運びであった。

「あたしゃね、陽に当たるように家の壁に、毛布を広げて吊しただけなんだよ」と、フーニアは、スリンゲット族(シスターズ)の女たちに千回目の言い訳をしていた。「毛布を広げて背を向けただけなんだよ。だって、パン生地を盗んで生の小麦を喰うあの子、つまりディーヤが、大きな鉄のポットに頭をつっこんで、ひっくり返って動けなくなってたんだ。風に吹かれる森の樹の枝みたいに、足をふらふらさせてね。あたしゃね、ただ彼を引っぱり出して、物事をもっとちゃんと理解できるように、あいつの頭をドアに二度ぶつけてやっていただけなんだよ。そしたらね、驚いたことに、毛布がなくなっていたんだよ」

「毛布がなくなってた！」と、女たちが畏怖するように囁き声で繰り返した。

「甚大なる損害だね」と一人目の女が言う。二人目も「あんな毛布は、いまだかつてなかったものだね」と。そして三人目。「毛布がなくなったことに、私たちは深く痛み入ってますよ、フーニア」。が、どの女も、内心ひそかに喜んでいたのである。その忌まわしい、不和の種にしかならない毛布がなくなったからである。

「陽に当たるように毛布を広げただけなんだよ」と、フーニアが千と一回目の話をはじめた。

「はい、はい」と、うんざりしたバウンが口を開く。「しかし、外の村からはこの村についての噂話が入ってきていない。ということとはだ、俺たちの村の誰かが、その毛布に捻破りの手を掛けたことなる」

「どうしてそうなるんだい！ バウン！」と、怒った女たちが声を揃えた。「そんな奴がこの村のどこにいるというんだい？」

「となると、魔法の仕業ということになるな」と、バウンが意地を通そうとした。とはいえ、彼も女たちの表情をこっそり伺っていたのではあるが。

「魔法の仕業！」この恐ろしき言葉に、彼女たちは黙り、お互い顔を見合わせた。

「そのとおりだね」とフリーニアが賛成する。姿を潜めていた悪意という彼女の性格が、この瞬間の喜びにとけ込んでいた。「そしてね、このことはクロック・ノ・トンにも知らされてるの。彼のところには、頑丈なパドルも届けられてる。午後の潮で、あの人が来てくれるはずなのよ」

この小さな集まりは散会となり、村が恐怖に包まれることとなった。あらゆる不幸の中で、魔法の仕事ほど恐ろしいものはない。触ることができず目で見ることもできない物事に対応できるのは、まじない師だけである。試練の瞬間その時がくるまで、悪魔が自分たちの魂にとり憑いているかどうか、男も女も子どもも分からないのだ。そして、すべてのまじない師の中で、隣村に住んでいるクロック・ノ・トンがもっとも畏れられた存在だった。彼のように邪悪な精を見つけられる者はなかったし、彼の犠牲者ほど痛ましい拷問にあった者もなかった。一度など、クロックは、生後三カ月の赤子の体に住みついていた悪魔を見つけ出した。そいつは大変にしつこい悪魔で、赤子を野バラ、茨イバラの上に一週間も載せておいて、やっと追い払うことができた。このあと亡骸は海に捨てられたのだけれど、まるで村に対する呪いであるかのように何度も何度も浜に打ち上げられた。赤子の亡骸がようやく消えてくれたのは、引き潮のとき二人の屈強な男が杭はらけに磔はりつけにされ、生贄となったときだった。

フリーニアがこの事態を解決してもらおうと呼んできたのが、そんなまじない師、クロック・ノ・トンだったのである。自分の村のまじない師スクンドーが蟄居処分となっていなかったら、良かったのだが。だって、スクンドーのやり方は、いつだってずっと大人しかったのだ。スクンドーがある男から二匹の悪魔を追い払ったことがある。その男は、その後、七人の子どもの父親となっていた。でも、仕事を任されたのは、クロック・ノ・トンなんだ！ 村人たちは、彼のことを考えただけで恐ろしくなり、不吉な予感に身震いした。また、村の誰もが、責任追求の眼まなこの焦点に自分になっていると感じて、誰もが周りの者にそのような眼差しを向けていた。誰もが、である。サイムを除いて、なのだが。サイム

は村の冷笑家。彼の悲惨な最期は、彼の数々の成功をもってしても揺るがすことのできない確実性で運命づけられていた。

「オヒョヒョ、オヒョヒョ」と、サイムは笑った。「悪魔とクロック・ノ・トンの対決！ あいつほどの悪魔は、このスリンケットの土地では見つからないよ」

「この馬鹿が！ あの方は、秘術と魔術をもってここに来てくださるところなのだ。だから口に気をつけてものを言え。さもなきや、災いがお前を襲い、この世でのお前の命が短くなるうというものだ」

これを言ったのは、ララーだ。別名を「嘘つき」という。これをサイムを嘲り笑った。

「俺はサイムだ。恐怖に不慣れで暗闇を恐れぬ者。父と同じく強き者で、聡明なる者。皆様方も俺も、目に見えぬ邪悪なものなど目にしたことはないはず」

「しかし、スクन्दローは見たことがある」と、ララーが答える。「クロック・ノ・トンも同じ。これは我々の知るところだ」

「馬鹿だね、どうしてそれが分かる？」とスクन्दローが怒鳴った。怒りの血潮が彼の牛のように太い首を黒く染めていた。

「当人たちがそう言ったからさ。だから本当に見たのさ」

サイムが鼻で笑う。「まじない師だって、ただの人だ。だから、あんたたちや俺たちと同じように、嘘をつくことだってある。ばーか、ばーか。もう一回、ばーか。そして、これはあんたたちのまじない師のぶん、こっちはまじない師にとり憑く悪魔のぶん。ばーか、ばーか！」

それから、右へ左へ指をパチパチ鳴らしながら、サイムは村人のあいだを進んでいった。村人たちは熱くなっている

たものの、恐れおののいて道を開けた。

「サイムは釣はうまいし、狩もうまい。でも、悪魔のような人だね」と、村の一人。

「それでも、羽振りはいいい」と、もう一人。

「というわけで、お前は悪魔のように羽振りがいい」と、肩越しにサイムが言い返す。「それで、もし皆が悪魔と同じなら、まじない師なんかには用はないはずなんじゃないのか。ばーか。ったく、暗闇を怖がるお子ちゃん、またちなんだから」

こうして、クロック・ノ・トンが午後の潮で到着する。そのときもサイムの反抗的嘲笑は鳴りをひそめてはいなかった。船着き場の砂地で、まじない師が転びそうになったときも、彼は冗談を飛ばすのを忘れなかった。憎々しげにクロックはサイムを睨みつけた。そして挨拶もせずに皆のあいだを抜けて、真っ直ぐにスクन्दーの家へと向かった。

スクन्दーとクロックとの会見に関して、村の者は誰一人として何も知らなかった。というのも、二人が密談していたとき、魔術のマスターたちを敬いすぎて近寄れず、遠くでひそひそ話を続けていたからだ。

「ごきげんよう、スクन्दーくん」と、クロックが低い声で言った。自分が村にどう受け入れられるかという不安から、声が確かに震えている。

彼は大男だった。身長の高いスクन्दーを前にすると、覆い被さるようだ。スクन्दーの弱々しい声は、まるでコオロギの声のように漂うばかりだった。

「ごきげんよう、クロック・ノ・トン様」とスクन्दーは返していた。「あなた様がいらっしゃられたものだから、良い天気となりました」

「それでもじゃ……」と、クロックは躊躇している。

「大丈夫ですよ、大丈夫」と、小さいまじない師が気短に口をはさんだ。「私は巡り合わせが悪かっただけなのです。私のするべきだった仕事をして頂くことになったわけで、感謝しておりますよ」

「友人スクन्दローよ、申し訳ない」

「いやいや、私は喜んでおりますよ、クロック・ノ・トン様」

「しかし、報酬の半分はそなたに渡すべきかな？」

「いやいや、お気持ちだけでけっこうです」と、スクन्दローは謙遜するかのように手を振りながら、口ごもる。「僕は、私の方でございますよ。このまま友人でいてくださったらという願いで、私の心はいっぱいです」

「今……」

「そう、今こうして友人としておつき合い下さっているように」

「そういうことであれば、この件、フーニアという女の毛布の件は、うまい商売ではないということか」

手がかり欲しさのあまり、大きなまじない師は、ここで小さな間違いをしてみました。スクन्दローは、かすかに灰色の笑みを浮かべた。彼は人の心を読むのに長けていたから、どのような人間もスクन्दローにはとても小さく見えていたのである。

「いつもの強力な魔術をお使いになられれば良いかと。さすれば、犯人はすぐさま知れるところとなりましょう」と、スクन्दローは言った。

「いかにも。犯人に私の目が触れれば、すぐに分かるう」。ふたたび、クロックは躊躇する。「他の土地から何か噂話などはなかったのかな？」と訊く。

スクन्दローは首を横に振った。「見て下さい。何とも見事なマクラク(妖怪)だとは思いませんか？」

彼はアザラシ革とセイウチ革でできた靴を掲げる。そして、クロックも好奇心を抑えながらそれを子細に検討した。

「これはすな、激しい競りに競り勝って手にしたもののですよ」

クロックは、慎重に頷く。

「ラーという男から入手しましてな。大した男なのですよ、あの男。ときどき思うのですが……」

「何を思うというのじゃ？」と、堪えきれなくなったクロックが訊く。

「ときどき思うのはすな……」と、スクन्दーが結論を出すかのように言った。言葉に最後にきて、彼の声は小さくなっていった。「今日はいいい天気です。だから、あなた様の魔術は強力でしょう。クロック・ノ・トン様」

クロックの表情が晴れる。「お前、すごい男じゃな、スクन्दー。まじない師の中のまじない師と言って良いじゃろう。それではお暇するとしようか。お前のことは、忘れんぞ。そして、お前が言うとおり、ラーとやらは、大した男なのだ」

クロックが小屋から出ていってしまうと、スクन्दーはドアを閉めた。彼の笑みは、さらにかすかで灰色のものとなった。そして、入り口の鍵を二重にかけた。

クロック・ノ・トンが浜辺にやってきたとき、サイムはカヌーの修繕をしているところだった。仕事の手を休め、わざとらしくライフル銃に弾を詰めると、すご横に置いた。

まじない師はこれを見ていて、大声をあげた。「全ての民をこの場所に集めよ！これが、悪魔を探す者、悪魔払いができる者の言葉じゃ！」

村人を集めるのは、フーニアの家にするつもりだった。だが、村人全員を集める必要があった。サイムが素直に従うか疑わしかったし、面倒はご免だったのである。彼の知性はこう教えていた。サイムは放っておけば問題のない男だが、

しかし、まじない師の健康のことを考えると、やはり厄介な奴である。

「フーニアという女をここへ連れてきなさい」と、クロックは命じた。周りを囲んだ村人をすごい顔つきで睨みつけ、彼を見つめる人びとの背筋を上から下へ、そして下から上へと凍らせた。

フーニアが前に進み出る。頭を垂れ、目を合わさないようにしている。

「お前の毛布はどこじゃ？」

「あたしゃね、陽に当たるように毛布を広げて吊しただけなんだよ。そしたらね、驚いたことに、毛布がなくなったんだよ」と、哀れっぽく彼女は言う。

「それで？」

「あれはディーヤのせいなんだ」

「それで？」

「思いつきし叩いてやったよ。もっと叩いてやるつもりだよ。だって、我ら貧しき村の民に災いをもたらしたのは、あの子なんだからね」

「毛布は！」と、クロックが声を嗔らせて大声を出す。お駄賃を低くしてもらおうという、フーニアの企みを見透かしていたのだ。「毛布じゃよ。その女。貴様の財産のことなら、知っておる」

「でも、あたしゃね、陽に当たるように毛布を広げて吊しただけなんだよ」と、彼女は鼻をすすす。「でも我らは貧しき民で、財産なんて何にも持っておりません」

クロックは、突如、恐ろしい形相となって体を怒らせる。すると、フーニアが後ずさりをする。が、彼がより目になり口を大きく開けて、急に前に飛び出してきたものだから、フーニアはよろけて倒れ込み、彼の足下にひれ伏してしまっ

た。クロックは腕を振り回しながら、罪の償いのため激しく虚空を打った。苦痛にもだえ、全身をくねらせている。癪か癪かの発作に襲われたかのようにだ。唾の泡が唇を汚し、体が悪寒と痺れて痙攣けいれんしていた。

周りにいた女たちは嘆きの歌を歌いはじめ、完全に自制心を失い、前へ後ろへ体を揺らしていた。男たちも、一人また一人と、この興奮に飲み込まれていった。最後まで冷静だったのは、サイムだけだった。サイムは、カヌーの上にちょこんと座って、馬鹿にしたように村人たちを眺めていた。そして、自らを鼓舞すべく力のかぎりの悪態をついていた。クロック・ノ・トンは、見るだに恐ろしい姿となっていた。自分の毛布はどうに捨て去り、衣類も引きちぎってしまったから、裸同然だ。まだ身につけていたのは、太股のあたりを隠す鷹の爪で留めた腰巻きだけだ。金切り声でどなり散らし、長い髪を夜の黒雲のように翻し、人びとの輪の周りを狂ったように飛び回る。何やら下品なりズムが、彼の狂気には含まれていた。皆が彼の動きに合わせて体を揺らし、声を合わせて雄叫びをあげていた。村人がこの波にすっかり飲み込まれたと知ると、クロックは、ピンと背筋を伸ばして座り込み、真っ直ぐに腕を伸ばして、長い指を猛禽の鉤爪のように立てた。これを迎えたのは、死者のうめき声のような低音の声だった。村人たちは、この恐ろしき指のさす先が自分のほうから逸れると、膝を震わせながらも跪いた。死が指先とともに去っていったのだ。指先が過ぎた者には、命が残った。指名から外れると、彼らは好奇の眼差しでまた指をじっと見つめた。

ついに、すさまじき叫び声とともに、運命の指先が、ララーのところまで止まった。自分はすでに死者になっていて、家財は分割され、妻は寡婦となり弟の嫁となっている、こう未来をみてとったララーは、ハコヤナギのように揺れた。必死になって口を開こうとしていた、否定しようとしていた。しかし口の中で舌は動かず、喉は砂を飲んだかのように耐えがたいほど渴いていた。クロックは仕事を終え、半ば意識を失っていたが、それでも目を閉じて、血を求める大いなる叫び声があがるのを待っていた。千回となく呪文により霊を呼び出してきた彼には、聞き慣れた雄叫びのはずだっ

た。部族の者が狼となって、震える犠牲者に飛びかかるのだ。だが、沈黙しかなかった。それから、小声のクスクス笑いがおこる。どこからということもなく。それがだんだんと広がり、ついには大笑いが空に届く勢いになった。

「なぜゆえじゃ？」と、クロックは大声になる。

「だって、だって」と村人が笑う。「お前の魔術が腐っているからさ、クロック・ノ・トン！」

「誰もが、知っている、ことなんだ」と、ラーラーが言葉詰まらせながら言う。「八カ月のあいだ、俺はサイウオッシュ・インディアンのアザラシ漁師たちと一緒に、遙かかなたで猟をしていた。そして帰ったのが今日。フーニアの毛布がなくなつたと知つたのも、今日」

「本当だよ」と、村人たちも声を揃えて言う。「ラーラーが帰る前に、フーニアの毛布はなくなつてたんだ」

「役に立たない魔術には、支払いはできないからね」と、事態のばかばかしさに腹を立てたフーニアが、立ち上がりながら言った。

しかしクロックの目に浮かんでいたのは、スクンドーの顔、彼のかすかに灰色の笑みだけだった。耳に届いていたのは、スクンドーの弱々しいコオロギのような声だけだった。「ラーラーという男から、これを手しましてな。よく思うのですが……。今日はいいい天気ですから、あなた様の魔術は強力でしよう……」

クロックは、フーニアのわきを抜けた。輪になつていた人びとは反射的に道をつくり、彼を通した。サイムがカヌーの上から嘲り声をかける。女たちは面とむかつてニヤニヤ笑いをする。通りすぎたあとに、嘲笑がわき起こった。でも、彼はいっさい耳をかさず、真っ直ぐにスクンドーの家へと急いだ。ドアをどんとどんと叩く。げんこつで叩く。呪いの言葉をおみまいしてやる。しかし、返答は返ってこない。ほんの一瞬静まりかえったとき、スクンドーの声、スクンドーの不気味な呪文を唱える声だけが聞こえてきた。クロックは狂つたように暴れ回った。けれども、大きな岩を持ってド

アをぶち壊してやろうとしたそのとき、男たち、女たちのどよめきが伝わってきた。ここで、余所の村の人びとを前にした自分に、力も権威もないことをクロックは悟ったのである。男が一人、さらにもう一人も、石ころに手を伸ばすのが目に入った。恐怖が全身を駆け抜ける。

「我らが魔術のマスターである、スクन्दローに手荒なまねをするでないぞ」と、ある女が叫ぶ。

「自分の村に帰ったほうがええぞ」と、ある男が脅す。

クロックは踵かかとを返すと、村人たちのあいだを抜け、浜へと向かった。胸には激しい怒りを覚えていたが、頭の中は守ってくれる物もない背中へのもっともな恐怖でいっぱいだった。けれど、石は飛んでこない。子どもたちが笑いながら足下にじゃれつき、あたりは軽蔑の笑いに包まれた。それだけだった。とはいえ、安堵の息をつけたのは、カヌーが海に出てずいぶん経ってからのことだ。舟の中で立ち上がると、無駄なことだと分かっていたが、村と村人に罵声を浴びせた。自分をはめたスクन्दローのことは名指しで罵ってやった。

岸のほうでは、スクन्दローを求める喝采の声があがっていた。誰もが彼の家の戸口に集まり、口々に懇願と嘆願の言葉を発している。するとようやく、スクन्दローが姿を現し手を挙げた。

「皆は私の子どもであるのだから、無罪放免である」と、彼は言う。「しかし、これで最後ということをお願いしたい。皆の軽率な行動が罰せられないのは、これが最後であるぞ。皆の願いは聞き届けられている。それが何であるのかは承知している。今晚、月が世界の裏側に回り、大いなる死者たちと対面する時刻となったなら、暗闇のなかフーニアの家の前に、皆あつまるように。そこで犯人が明らかとなり、彼は罪に値する罰を受けることになる。かく私は語りき」

「犯人は死罪ということだな」と、バウンが怒鳴る。「ここまで我々を悩まし辱めたのだから」

「そうするが良い」と、スクन्दローは答えドアを閉めた。

「これで全てが明らかとなり、ふたたび我々は安心することができる」と、神託を唱えるかのようにララーが言う。

「小さい男スクンドーのおかげで」と、サイムが鼻で笑う。

「身長の高い男スクンドーの魔術のおかげで」と、ララーが訂正する。

「このスリンケツト(原註)の連中は、お馬鹿さんで、まるで子どもだな」と、サイムは自分の股をバシッと音を立てて叩いた。「いい歳をした女やでかい図体をした男たちが、夢みたいな話や驚きの物語とかを信じてるなんて、俺の理解を超えてるね」

「私は旅してきた者だ」とララーが答える。「大海を旅し、不思議な出来事の数々を見てきた。だから、物事というのはそうなっていると知っている。私の名は、ララー……」

「嘘つきのララー」

「そう呼ばれることもあるが、正しくは、『遠くを旅する者』」

「俺はそれほどの好きじゃないが」と、サイムが話を始める。

「じゃ、黙っている」と言っ、バウンがあいだに入った。こうして二人は怒りながらも、別れ別れになった。スクンドーが、フーニアの家のまわりに集まった村人のところへやって来た。敏捷で緊張感のある歩き方だ。フーニアが使っていた麁脂肪ランプの光で見た者たちは、スクンドーが手ぶらで来たのが分かった。まじない師の商売道具であるガラガラもマスクもその他の備品も持っていない。腕の下に大きくて眠そうな大鴉を抱えているだけだ。

「仕事が終わったときに皆が見えるよう、焚き火用の薪は集めてあるか」と、スクンドーが訊いた。

「はい」とバウンが答えた。「薪ならたくさん準備しておきました」

「それでは、皆の者、良く聞け。私の話は長くはない。私は、大鴉ジュエルチを連れてきた。謎を解き、物事の本質を

知らせる大鴉だ。この黒き大鴉を、私はフーニアの家でいちばん暗いところにある、大きな黒いポットに入れる。ランプは消すが良い。そして、皆、外の暗闇に残る。とても単純な手順だ。一人ずつ家に入る。一息吸い込むあいだ、ポットの上に手を置く。そして家から出てくる。罪を犯した者が近づけば、ジェルチが大声で鳴く。そうでなかったら、ジェルチが彼の知恵を我々にどう伝えるというのか。皆、準備はよいか？」

「それでは、私が順番に全員の名前を呼ぶ」

こうして、ララーの名が最初に呼ばれた。彼はすぐに中に入った。誰もが耳をそばだてた。静寂のなか、ララーが床をキーキーと軋ませながら床の上を進んでいくのが聞こえる。だが、それだけだった。ジェルチは鳴かず、何も知らせてこない。次に呼ばれたのはバウンだ。隣人に罪をなすりつける魂胆で、自分の毛布を盗むということもあり得ない話ではなかったからである。フーニアが続き、ほかの女たち、子どもたちも続いた。しかし、何の結果も出ない。

「サイム」と、スクンドーが名前を呼ぶ。

「サイム」と、繰り返した。

でも、サイムは動かなかった。

「暗闇が怖いっていうのか？」と、自らの潔白が証明されたララーが詰め寄る。

サイムが笑った。「馬鹿馬鹿しいよ。これ全部、馬鹿みたいだよ。でも、やるよ。こんな魔術を信じてはいないけど、怖がっているわけじゃないと証明するためにね」

堂々と中へ入り、出てきたときには、まだ笑っていた。

「お前は、ある日、非業の死を遂げることになるよ」と、義憤に満ちたララーが囁いた。

「そのとおりだな」と、軽々と冷笑家サイムが答える。「ベッドで死ねる人は少ない。まじない師という災いもあるし、

大海という災いもある」

村人の半数がこの試練を通過した。抑えていたがゆえに興奮は痛いほどに強烈だった。三ぶんの二の村人が通過したとき、初産を終えたばかりの若い女が倒れた。恐怖を、神経質なキヤッキヤツという引きつり笑いで表現していた。

ついに最後の者の番となった。ここまでのところは何も起きていない。ディーヤが最後の一人だ。やっぱりあの子だったんだわ、とフーニアが星に嘆きを届け、他の者たちは、この不運な子どもから距離を取ろうとして、後ずさりした。ディーヤは恐ろしさのあまりもう半分死んだようなもので、膝がガクガクし敷居のところまでよろよろと進んだかと思うとひっくり返りそうになる。スクन्दドーが彼を中に押し込み、ドアを閉めた。長い時間が流れた。やがて聞こえてきたのは、少年のすすり泣く声だけだった。それから、部屋の隅にむかってゆっくりゆっくり進む足音と、床が軋む音が聞こえてきた。止まる。そして、戻ってくるときの軋み音。ドアが開き、ディーヤが飛び出してきた。何も起こらなかった。彼が最後の一人だったのに。

「焚き火に火を点けよ」と、スクन्दドーが命じた。

明るい炎が舞い上がり、消えつつあった恐怖の影にまだ彩られている顔、そして不安で曇る顔が明らかとなった。

「作戦は失敗だったね」と、高音の声でフーニアが囁く。

「そのとおり」と、バウンが満足げに答えた。「スクन्दドーももう歳なんだ。新しいまじない師が必要みたいだな」

「ジェルチの知恵はどこへ行ってしまったんだあ？」と、スクन्दドーがララーの耳元で笑う。

ララーは「分らない」と言いたげに額を拭ったが、何も言わなかった。

サイムは得意になって胸を張り、背の低いまじない師のところへスキップして行った。「ほーら、ほーら。俺が言ったとおり、何も起こらなかったじゃないか」

「そのように見える。確かにそのように見える」と、スクन्दローが穏やかに答えた。「謎解きの技術に通じていない者には、そう見えるのじやろう」

「スクन्दローだってその技術に通じてないよね？」と、大胆にサイムが問う。

「おそらく、そうなのじやろう」。スクन्दローはとても柔らかな話し方をした。臉が下がり、さらに下がり、もっと下がりがり、とうとう目が隠されてしまいそうだった。「それでは、別の実験を試みたい。男たち、女たち、子どもたち、全員いっせいに手を高々と挙げてみよ。頭の上まで」

命令があまりに突然だったものだから、そして有無を言わさぬ命令であったから、疑問をはさむ余地もなく、皆、従った。どの手も高々と挙げられていた。

「隣りの者の手を見るように。全員の手が見られるように」と、スクन्दローは命じる。「そうすると……」

しかし、笑い声に、それは怒りの声というべきだったが、その声に、スクन्दローの声はかき消された。全員視線がサイムに注がれていた。彼の手を除いて全員の手が煤で黒くなっていたのだ。サイムの手だけが、フーニアのポットの煤で汚れていなかったのである。

石つぶてが空を切った。それが彼の頬を打った。

「これは嘘だ」とサイムは叫ぶ。「嘘だ。俺はフーニアの毛布のことなんて何も知らない」

二つ目の石は彼の額に当たり、血が吹き出した。三つ目は頭の横を飛び、血に飢えた雄叫びがあがった。村人たちは誰もが何か投げる物がないかと地面を探していた。サイムはふらふらになって、その場に崩れた。

「冗談だったんだよ。ただの冗談さ」と、悲鳴になっていた。「冗談で毛布を取っただけなんだよ」

「毛布はどこに隠した？」と、スクन्दローの高音で鋭利な声がナイフのように喧嘩を切り裂いた。

「うちの大きな皮袋の中さ。家の棟木に吊してある袋の中」というのが返答だ。「でも、ただの冗談だったって言うてるじゃないか」

スクンドーは頷き、そしてまた大量の石が飛び交うこととなった。サイムの妻は膝に頭を垂れて黙って泣いていたが、幼き息子はキャッキヤ、キャッキヤと言って石投げの仲間に加わった。

フーニアが大切な毛布を持って、ふらふらした足取りで帰ってきた。スクンドーが彼女を止める。

「わしらは貧しい民で、何も持っておらんのだよ」と言って、フーニアは泣いている。「だから、きつい取り立ては許しておくれよ、スクンドー」

村人たちは、集めた石の山から石を投げのを止めると、二人を見つめた。

「いやいや、きつい取り立てなんて私の流儀じゃない」と、スクンドーが答える。毛布に手を伸ばしていた。「きつい取り立て屋なんかじゃないことの証しに、もらうのはこれだけにしておこう」

「わが子どもたちよ、私は賢くないか？」と、彼は問う。

「スクンドーは、じつにじつに賢い！」と、村人たちが声を合わせて叫んだ。

こうしてスクンドーは暗闇へと去っていった。腰に毛布を巻きつけ、腕に眠たそうなジュエルチを抱えて。

《訳注》

(1) ダッチハーバー (Dutch Harbor)。アラスカ州の北太平洋、アリューシャン列島のウナラスカ島にある村。

(2) セントメアリーズ (St. Mary's)。ユーコン河の支流、アンドレフスキー川沿いのアンヴィック、ホーリー・

クロス近くの村。ドーンソン・シティから東に約六百キロに位置する。地名自体は正確であっても地理的に厳密な

わけもなく、マジック・リアリズムの先駆けとなる、あくまでユーモアのために記述なのだが、「ダッチハーバーからセントメアリーズ」というのだから、海から川を上ってという水の流れになる。フーニアの毛布の噂がやがて金発見に沸くドーソンあたりにまで届く、ということなのだろうか。いずれにせよ、舞台はアリュエシャン列島の島のどこかということになる。

(3) スリンゲット族 (Thinget)。訳注(4)(5)の箇所にある「スリンケット」の誤記と思われる。「スリンゲ(ケ)ット」は、「トリンギ(キ)ット」(Tlingit/Thinkit)のことだろう。

北アメリカ大陸、太平洋北西沿岸地域に現在も住む大陸原住民。部族名・地名は、「潮の民」という意味。内陸部「トリンギ(キ)ット」族の居住範囲は、当然ユーコン準州も含む。母系社会を構成する部族としても知られる。

尚、現代アラスカにおいて十年以上にわたり現地の人びとと暮らし、当然のことながらエスキモー、インディアンの歴史と伝統に深く魅せられ多くの著作を残した星野道夫は、「クリンギット族の寡黙な墨守」(『Quiet Gravekeeper of Tlingit』)という表記を用いている(『ほくの出会ったアラスカ』小学館文庫p.116)。だが、これはそもそも文字を持たなかった民族に西洋人がどういう名付けをしたのか、その《ぶれ》ということにすぎない。だから、我々は何が正しいのか、正しかったのかを問題にしているのではない。ロンドンがどうぶれて、どのように落ち着きを見出したのか、この点に注目している。

(4) スリンケット (Thinket)。訳注(3)を見よ。ロンドンは、「キーシユの息子」で「Thlunget」本作品「マスタ」で「Thinget」。「Thinket」。「リコウン」で「Thinket」と表記しているが、執筆順を考えると、徐々に「Thinket」に落ち着いていったようだ。尚、アンナ・ストランスキー宛ての手紙(1902/12/20, p.329)でも、

——いろいろな意味でとても興味深い手紙である——“Thinket”を用いている。

- (5) マクラク。エスキモーの長靴。「ナム・ボック」の訳注を見よ。「ナム・ボック」、「マスター」、「孤独な酋長」にはこの長靴への言及があり、そのエキゾチズムから短編集全体がつながりを持つ。またこれら三作以外でも「エスキモー」との記述がある。「極北の森」には、北極海、ベーリング海を強く匂わせる表現が多い。これらは比較的近い地域・部族を想定しているように思える。モチーフにより作品を連係させ、短編集における象徴的小宇宙創造を作家は狙っていたのだろう。
- (6) スリンケット (Thinket)。訳注(3)(4)を見よ。

【訳者付記】

※アール・レイバー他編集の『ジャック・ロンドン書簡集』からの引用は、統一的に(日付、頁)のフォーマットとす。(year/month/day, p. nnn)。

“The Master of Mystery”。短編集『氷点下の子どもたち』に四作目として収録されている作品。白人が登場せず白人文化の影響にもほとんど言及されない、ネイティヴのフォークテイル(イギリス製の毛布と、さりげなく帝国主義的影響の存在が示唆されているが)。語り口の軽さが特徴の、たいへんに良くできた謎解きコメディである。プロットというほど大げさな仕掛けではないが、「何が謎か」と読者は読み解こうとし、見事に外される(ことだろう)。冒頭で「これ全部の原因」であるとされ「悲観的に世界を観察」するディーヤも、結末部できちんと登場する。プロの作家らしい仕事ぶりである。

作品の終わり方は少々残酷なかもしれない。が、あまりリアリズムに沿って読むのが適当な作品だとも思えない。しかしシャーリー・ジャクソンの有名な短編作品「くじ」(「The Lottery」)を思い出せば、投石による共同体内の殺人行為は、西洋文明が恐怖し、そして実際に行われた風習なのだろう。

村の異端児が排除されるという、この作品の構図は、いくつかの短編と共通する。村社会の掟への異分子とは、ロンドンその人のことではないかと想像させなくもない。冒頭で女、男、犬、子どもの順で登場させるのは、ディーヤの存在を重くさせる(よって話を軽くする)狙いを考慮するとしても、やはりロンドンらしい。思わずユングを持ち出したくなるような、ロンドンらしいひねりを入れた人類のアーキタイプな順序である。

「ネイティブもの」とは括れない作品なのだろう。ロンドンと読者がネイティブと一体化して彼らの世界を体験するかと問われれば、明らかに、それは違う。近代社会、資本主義社会(権威、価値、商品化、ブランドカリートームなど)が戯画化されていると考えたほうが良さそうである。

『アウト・ウェスト』誌に発表された。ロンドンが受け取った原稿料は十五ドル。この雑誌は、一八九四年『ランド・オブ・サンシャイン』という名のもとで創刊され、一九〇二年に『アウト・ウェスト』に改名、一九一三年に『オーヴァーランド・マンズリー』誌と合併した。原稿料の安さのせいだと思われるが、この短編集の二作品しか(もう一編は、「孤独な酋長ローン・チーフの病」)、ロンドンはこの雑誌に寄稿していない。編集者の一人、C・A・ムーディが、一九〇一年十月頃にロンドンを訪ねている。この関係での投稿だろう(1901/10/9, p. 257)。

短編集に収められた作品それぞれが、当時の文学市場でどのように扱われたかをまとめてみる。

〈作品タイトル〉	〈掲載誌〉	〈語数〉	〈受領額〉	〈1語あたり〉
“In the Forest of the North”	<i>Pearson's Magazine</i>	6,800	\$150	2.2 cents
“The Law of Life”	<i>McClure's</i>	2,700	\$55	2.0 cents
“Nam-Bok the Unveracious”	<i>Ainslee's Magazine</i>	5,500	\$100	1.8 cents
“The Master of Mystery”	<i>Out West</i>	4,100	\$15	0.4 cents
“The Sunlanders”	N/A	8,000		
“The Sickness of Lone Chief”	<i>Out West</i>	3,700	\$10	0.3 cents
“Keesh, the Son of Keesh”	<i>Holiday Magazine for Children</i>	3,300	\$27.50	0.8 cents
“The Death of Ligoun”	N/A	3,600		
“Li Wan, the Fair”	<i>Atlantic Monthly</i>	6,500	\$100	1.5 cents
“The League of the Old Men”	<i>Brandur</i>	6,400	\$160	2.5 cents

作家自らが投稿に乗り出す前に、『マクルアーズ』『コスモポリタン』『コリアーズ』『ハーバース』『サタデー・イブニング・ポスト』『エヴリバアティーズ』『ウーマンズ・ホーム・コンパニオン』など、当時のメジャーな雑誌はほぼすべてに、エージェントのポール・R・レイノルズによって送られている。

レイノルズの杜撰で機械的と思われる投稿作業のあと、ロンドン自身が原稿を送ったのは、順に『リップピンコッツ』（マクルアーズ社から『雪原の娘』を回された出版社の雑誌）、『ナショナル』『アウト・ウェスト』である。『マクルアーズ』『コスモポリタン』『コリアーズ』などと比較するまでもない、一流とは言いがたい種類の雑誌群だ。ロンドンの

市場感覚からすると、この手の「軽い」作品は、それらシリアスではない、エンターテイメント主眼の大衆雑誌のほうに需要があったということなのだろう。もちろん、原稿料は高くないが、『狼の息子』の佳作が『オーヴァーランド・マンスリー』誌に、一作五ドルとか七ドル五十セントとかで買い取られていたこと、あるいはロンドンがなり得た郵便配達員の月給が四十五ドル (Kingman, p. 24) であったことを考えると、このような小額の原稿料で作品が商品として扱われた市場があったとは理解できる。市場規模自体はとて大きなものだったのだ。それでも四千語程度の「マスター」や「孤独な酋長」が十ドル程度だったのだから、そのような作品ばかりでは、作家としての生活は成り立たなかったろうとも思わせる（尚、郵便局の給料は六カ月後に六十五ドルに自動的に昇給されることが約束されていた）。

マクミランのG・ブレットの重さとはまったく違うが、ロンドンの生涯の唯一のアメリカ国内のエージェントだったポール・リヴィア・レイノルズ（一八六四—一九四四）について情報を簡単にまとめておく（以下、情報ソースはレイバー他の『書簡集』『短編全集』Appendix A: Publication History II「雑誌管理台帳」、J・ウィリアムズの“Works by the Date of Composition”）。

大雑把に言って、レイノルズとの関係は偶然に、つまりロンドンの意図とは関係なく始まった。ロンドンからの借金取立てに苦勞していた『マクルアーズ』誌編集部が勝手にレイノルズに原稿を回したのがきっかけである。どうもロンドンに断れ切れなかったということらしい (1901/12/17, p. 260)。

レイノルズのエイジェンシーは、一八九三年にニューヨークで創業された「ポール・R・レイノルズ・アンド・サン」でアメリカ最初の文芸エイジェンシーだった。ロンドンの作品に関していえば、東海岸の小さな雑誌に、作家自身の手では雑誌掲載が困難と思われた作品を載せるのに成功した。コミッションは十%程度で、これを高いとみるか安いとみ

るかは難しいところだが、おそらくロンドンは高いと感じていたようだ。そして、その掲載誌探しの技術も、ロンドン
は決して高く評価していなかったようだ(1907/9/12, p. 709)。ロンドンの短編でもっとも有名な「火を熾す」(七二〇
〇語)を『センチュリー』誌に四百ドルで掲載させたのがもっとも注目されるレイノルズの仕事だが、これはスナーク
号の航海中のことで、ロンドンは容易に原稿を郵便局に持ってゆくことができなかったのだから、レイノルズは運が良
かっただけであると言うのが正しいだろう。「預かりもの」(『Trust』, 四五〇〇語)が次に『センチュリー』誌に掲載
された作品だが、こちらはロンドンに指示に従ったニネットタにより五百ドルで掲載契約が成立している。「レイノルズ
より自分のほうが雑誌市場のことがよく分かっている」と書いたロンドンの自己評価は、間違っていない。

雑誌掲載が困難な作品の扱いを頼めること、ときどき「うまい話」をもってきてくれること、この二点を、レイノル
ズに関しロンドンに評価している(1911/9/28, p. 1031)。

「雑誌管理台帳」とロンドンの書簡から読み取れるレイノルズとの関係で興味深いのは、ロンドンが「シリアス」な
作品と「青少年向け」のものを峻別していたことだ。卵をクロンダイクで売りさばくという主人公の執念と挫折、そし
て自死の物語「千ダース」を、レイノルズは『ユース・コンパニオン』に送った。このときロンドンは、『コンパニ
オン』編集部に宛てて「あれは『コンパニオン』向けの作品ではまったくなかった。申し訳ない」と書いている(1902/
4/24, p. 290)。

レイノルズが雑誌掲載という結果を出した作品は、主に以下である。

〈作品名〉	〈掲載雑誌〉	〈受領額〉	〈掲載年月〉	〈脱稿年月日〉
"A Relic of the Pliocene"	Collier's Weekly	\$102.50	1901/01	1900/06/18

“In the Forests of the North”	<i>Pearson's Magazine</i>	\$150	1902/09	1901/11/02
“When God Laughs”	<i>Smart Set</i>	\$200	1907/01	1906/03/20
“The Passing of Marcus O'Brien”	<i>Reader</i>	\$350	1908/01	1907/03/04
“A Curious Fragment”	<i>Town Topics</i>	\$100	1908/12	1907/04/16
— during <i>Snark</i> Voyage & Ecuador travel (1907/04-1909/07)				
“Flush of Gold”	<i>Hampton's Broadway Magazine</i>	\$250	1908/10	1907/05/24
“To Build a Fire”	<i>Century</i>	\$400	1908/08	1907/05/29
— during <i>Snark</i> Voyage & Ecuador travel				
“The Night-Born”	<i>Everybody's</i>	\$500	1911/07	1910/05/20
“Bunches of Knuckles”	<i>New York Herald Art Section</i>	\$750	1910/12	1910/09/12
“Told in the Drooling Ward”	<i>Bookman</i>	\$100	1914/06	1910/10/10
“The Prodigal Father”	<i>Woman's World</i>	\$750	1912/05	1911/05/12
— during Oregon Trip (1911/6/12-1911/9/5)				
“By the Turtles of Tasman”	<i>SF Call Monthly Magazine</i>	\$1000	1911/11	1911/07/30
“The End of the Story”	<i>Woman's World</i>	\$1000	1911/11	1911/08/09

— during Oregon Trip

— during *Dirigo* Travel (1912/03/02-1912/07/26)

“The Captain of the Susan Drew” *San Francisco Call*

\$1000

1912/12

1912/07/26

— during *Dirigo* Travel

旅行中という理由がない場合、これらは市場を無視して書かれた「実験作」と考えて良いだろう（掲載誌確保に困難が予測される）。「神が嘔うとき」以降は、ロンドンの判断が含まれていたと考えてよい。それ以前は、『マクルアーズ』編集部が自動的に原稿を回した可能性が高いからである。「マークス・オブライエンの行方」には「マスター」と同じ西部のユーモア（トール・テールに何か都会風味がある）が、「神が嘔うとき」、「夜に生まれし者」、「涎流し病棟で話されたこと」には、ロンドン独特の不気味でおかしい雰囲気があったよう。前者二作は短編集のタイトル・ピースになっていることから分かる通り、そんな異様な秀作だ。

あまりにケース・バイ・ケースの議論になってしまいが、實際上雑誌に掲載される短編小説の原稿料のリミットが千ドルだったと考えて（記録に残るロンドンの最高額）、このリストを見ると、以下のJ・オーエルバックの主張を支持するのは難しいのかもしれない。『サミュエル』や『涎流し病棟で話されたこと』のような後期の作品の重要性を指摘する際、レイバーとリースマンは、これらの作品を出版するのが困難だった点をもって、その実験性の高さの証拠としてようとしている。そうであるのかもしれないが、別の考え方もありうる。市場に購買の余裕がないほどに、ロンドンの値段が上がってしまったのだ、と（Auerbach, p. 283）。

「ホワイト・サイレンス」(三八四〇語。十語あたり一セント)を五ドルで売ったことのある作家は、「スーザン・ドルー号の船長」(“The Captain of the Susan Drew,” 七二七四語。十語あたり一三六セント)を千ドルで売る作家になった。最大効率でお金を稼いでくれたこの作品を高く評価する研究者はいない(たとえば、ほとんどの短編作品の梗概を載せるリースマンの『コンパニオン』にさえ、エントリーされていない)。だが、十五ドルだった「謎解きマスター」は、現代においても読むに値する。

参考文献

- Auerbach, Jonathan. *Male Call: Becoming Jack London*. Durham: Duke UP, 1996.
- Kingman, Russ. *Jack London: A Definitive Chronology*. Los Angeles: David Rejl, 1992.
- Labor, Earle et al eds. *The Letters of Jack London*, 3 vols. Stanford: Stanford UP, 1988.
- Mott, Frank Luther. *A History of American Magazines*. 4 vols. Cambridge, Mass: Harvard UP, 1957.
- Reesman, Jeanne Campbell. *Critical Companion to Jack London: A Literary Reference to His Life and Work*. New York: Facts on File, 2011.
- Williams, Jay. *Author under Sail: The Imagination of Jack London, 1893-1902*. Lincoln: U of Nebraska P, 2014.
- “Jack London’s Works by Date of Composition,” in *American Literary Realism* vol. 23, 2, winter 1991, pp. 64-86.

(おおや・たけし 理工学部准教授)